

(様式2) 令和2年度学校経営計画に対する評価計画(重点目標に対する各課・学年の取組)

重点目標	具体的取組	主担当	現 状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	(中間集計)集計	成果と課題及び改善策等	判定基準	備 考
1	① 地域(生徒・保護者)の期待と信頼に応える学習指導と進路実現を達成するため、家庭学習習慣を確立し、「確かな学力」を図る。	教務課各学年各教科	授業改善に取り組んでいるが、生徒が主体的・協働的に活動する場面がまだ十分ではない。	【成果指標】 生徒による授業評価を実施し授業改善に努める。	授業がわかりやすいと答えた生徒の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	(89.1%) B 89.0%	《成果》 授業がわかりやすい項目に、「とても当てはまる」、「やや当てはまる」と答えた生徒が89%であった。 【課題】 授業がわかりにくい項目に、「とても当てはまる」、「やや当てはまる」と答えた生徒が授業が解りにくいと答えた生徒が11%おり、これらの生徒を減少させる必要がある。また、前期と数字が変わらなかった。 『改善策』 授業評価アンケートをもとに、教員が授業を振り返るとともに、互見授業を通して授業改善に取り組む。	C以下の場合 は取組を改善する。	生徒へのアンケート
				【努力指標】 生徒が主体的・協働的に活動できる場面を取り入れている。	授業では生徒がアクティブラーニングやグループ活動など主体的・協働的に活動できる場を、 ア. よく取り入れている。 イ. やや取り入れている。 ウ. あまり取り入れていない。 エ. 取り入れていない。 A アとイの合計が80%以上 B アとイの合計が70%以上 C アとイの合計が60%以上 D アとイの合計が60%未満	(79.2%) A 81.8%	《成果》 22名中18名が生徒が主体的・協働的に活動できる場面を取り入れていると答えた。 【課題】 新型コロナウイルスの影響で、グループ活動を十分に行うことが出来ないと答えた教員もいるため、活動の方法を工夫する必要がある。 『改善策』 感染防止対策をしつつ、状況を見ながらグループ活動を取り入れたり、生徒が主体的に活動できる工夫が出来るように取り組む。	C以下の場合 は取組を改善する。	教員へのアンケート
				【努力指標】 授業改善に生かす目的を持って、互見授業に、	授業改善に生かす目的を持って互見授業に参加した。 A 6回以上参加した。 B 5回以上参加した。 C 4回以上参加した。 D 4回未満参加した。	(6.01回) A 7.3回 (平均)	《成果》 1月までに全員が6回以上の互見授業に参加することができた。 【課題】 今年度は4月、5月の休業期間に研究授業を設定し互見授業を実施することが出来たが、来年度は同様の取組が出来ない可能性がある。また、小中学校での公開授業等の機会が少なかつた。 『改善策』 互見授業週間を設けたり、機会をみつけて小中学校への参観を依頼するなど、早期に目標を達成するように働きかける。また、多忙化などの業務改善に取り組む、互見授業に参加しやすくする。	C以下の場合 は取組を改善する。	教員へのアンケート
	② 家庭学習時間調査と個人面談を行うことで家庭学習習慣の定着を図り「確かな学力」を育成する。	教務課各教科各学年	家庭学習習慣が身につけていない生徒、家庭学習時間が不十分な生徒が多く、家庭学習習慣の定着が求められている。	【成果指標】 普通科では学年30分の家庭学習が確保された。	〔普通科1年〕90分の家庭学習に対する取り組み状況が、 100%達成の生徒数を a 80%以上達成の生徒数をb 60%以上達成の生徒数をc 60%未満の生徒数を d とし、段階的に評価する。 (1.0×a + 0.9×b + 0.7×c + 0.5×d) / 40×100 (%) で計算した結果、学習時間を達成できている人数の割合が A 80%以上である B 70%以上である C 60%以上である D 60%未満である	(88.8%) A 84.6%	《成果》 定期考査に向けて早めに範囲を提示し、休日の学習を促した。また、計画的に週末課題を課し、学習時間を確保させることができた。 【課題】 部活動等やスマートフォン使用に時間を割かれ、十分に学習時間を確保できない生徒がいる。 『改善策』 すき間時間の活用や、休日の活用、定期考査発表後の時間の活用について指導し、意識的に学習時間を確保するように助言する。	C以下の場合 は取組を改善する。	月毎にクラスの学習記録を集計
				【成果指標】 普通科では学年時間の家庭学習が確保された。	〔普通科2年〕120分の家庭学習に対する取り組み状況が、 100%達成の生徒数を a 80%以上達成の生徒数をb 60%以上達成の生徒数をc 60%未満の生徒数を d とし、段階的に評価する。 (1.0×a + 0.9×b + 0.7×c + 0.5×d) / 40×100 (%) で計算した結果、学習時間を達成できている人数の割合が A 80%以上である B 70%以上である C 60%以上である D 60%未満である	(83.5%) A 82.1%	《成果》 進路意識の高まりに伴い学習時間を伸ばした生徒や、定期考査の2週間前から意識的に学習を始めた生徒が増えた。 【課題】 休日の学習時間において、各個人で立てた目標の6割程度の時間しか達成できていない生徒が多い。 『改善策』 休日の時間の使い方をパターン化し、立てた予定通りに学習に取り組ませる。各教科と連携し、平日・週末それぞれバランスを考えた課題に取り組ませる。	C以下の場合 は取組を改善する。	月毎にクラスの学習記録を集計
				【成果指標】 普通科では学年時間の家庭学習が確保された。	〔普通科3年〕180分の家庭学習に対する取り組み状況が、 100%達成の生徒数を a 80%以上達成の生徒数をb 60%以上達成の生徒数をc 60%未満の生徒数を d とし、段階的に評価する。 (1.0×a + 0.9×b + 0.7×c + 0.5×d) / 40×100 (%) で計算した結果、学習時間を達成できている人数の割合が A 80%以上である B 70%以上である C 60%以上である D 60%未満である	(87.2%) A 86.0%	《成果》 受験や考査に対して熱心に取り組む生徒が増加した。クラスには4時間以上の家庭学習に取り組む生徒もおり、自主的に課題をみつけて取り組むことができた。 (a:16人、b:11人、c:10人、d:3人) 【課題】 進路決定後に大幅に学習時間を落とす生徒もいることから、出口指導にとどまらず、進路先での学びを意識して高校生活を送るよう指導する必要がある。 『改善策』 各教科と連携して、定期的にバランスの取れた課題を出す。また、学習時間調査を利用して、学習量の少ない生徒には面談を通じて学習を促す。	C以下の場合 は取組を改善する。	月毎にクラスの学習記録を集計
				【成果指標】 地域産業科では提出物を期限内に提出することができた。	〔地域産業科1年〕提出物や課題を提出期限内に提出することができた。 ア. すべて提出した。 イ. 大体提出した。 ウ. あまり提出しなかった。 エ. ほとんど提出しなかった。 A ア. イの合計が90%以上 B ア. イの合計が80%以上 C ア. イの合計が70%以上 D ア. イの合計が70%未満	(85.4%) A 92.0%	《成果》 課題提出の大切さを、学年当初より意識させた結果、ほとんどの生徒がしっかりと提出できた。 【課題】 特定の生徒の未提出が続いている。学習到達レベルに差があり、提出が遅れる生徒もいる。 『改善策』 未提出の生徒に対し、教科担当者や保護者と協力し、課題の内容や意義を理解させる。学習レベル到達レベルに応じて、課題の量や内容を調整し、個々に応じた対策を講じる。	C以下の場合 は取組を改善する。	月毎にクラスの学習記録を集計
				【成果指標】 地域創造科では提出物を期限内に提出することができた。	〔地域創造科2年〕提出物や課題を提出期限内に、 ア. 必ず提出した。 イ. ほとんど提出した。 ウ. あまり提出していない。 エ. 提出してない。 と答えた生徒の割合が、 A ア. イの合計が90%以上 B ア. イの合計が80%以上 C ア. イの合計が70%以上 D ア. イの合計が70%未満	(80.2%) A 91.3%	《成果》 進路意識を持たせることで、提出率を高めることができた。 【課題】 課題の提出率が悪い生徒が一部にいる。 『改善策』 課題の提出率の悪い生徒であっても、期日を守って提出できている日もあることから、進路意識を持たせることで、提出物の大切さを指導していく。	C以下の場合 は取組を改善する。	月毎にクラスの学習記録を集計
				【成果指標】 地域創造科では提出物を期限内に提出することができた。	〔地域創造科3年〕提出物や課題を提出期限内に、 ア. 必ず提出した。 イ. ほとんど提出した。 ウ. あまり提出していない。 エ. 提出してない。 と答えた生徒の割合が、 A ア. イの合計が90%以上 B ア. イの合計が80%以上 C ア. イの合計が70%以上 D ア. イの合計が70%未満	(81.1%) B 82.1%	《成果》 社会人に必要なことを指導することで、生徒の意識も高くなり、提出率を高める事ができた。 【課題】 提出期限を守れなかったり、忘れたりする生徒が固定化している。 『改善策』 手帳に課題提出期限等をメモすることを習慣化することで、忘れるということを減らしていくよう指導する。	C以下の場合 は取組を改善する。	生徒へのアンケート

(様式2)

令和2年度学校経営計画に対する評価計画(重点目標に対する各課・学年の取組)

重点目標	具体的取組	担当	現 状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	(中間集計)集計	成果と課題及び改善策等	判定基準	備 考
③	各課・各教科と学年団との連携と情報の共有化により生徒個々に応じた多面的な進路指導を行い、生徒が進路実現に向けて意欲的に学習などに取り組める環境づくりを進める。	進路指導課各学年	進路希望先を具体的に決定するのが遅れるため、進路実現に向けて準備期間が不十分になる傾向がある。	【成果指標】 年度末までに おおまかに進路目標を定め、次の行動を意識することができた。	〔1年〕 年度末までに、進学はおおまかに上級学校を、就職はおおまかに職種を定め、次の行動を意識できた生徒の割合が、 A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	(61.2%) B 74.6%	《成果》 面談週間や進路ガイダンスを通して、多くの生徒がだまかに進路希望を決めることができた。 【課題】 進学か就職か未定の生徒が7名、進学だが区分が未定の生徒が10名いる。 『改善策』 進路希望先が未定の生徒に対し、早期に重点的に面談を行い、3学期の模擬テストや基礎力診断テストまでに方向性を出せるように助言をする。	C以下の場合 は取組を改善する。	・進路希望調査 ・生徒へのアンケート
				【成果指標】 年度末までに 具体的に進路目標が定まり、実現に向け準備を始めた。	〔2年〕 年度末までに、進学は具体的な上級学校を、就職は具体的な職種を定め、実現に向けて準備を始めた生徒の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	(63.4%) C 75.4%	《成果》 担任・副担任との面談や進路ガイダンスを通して、具体的な進路志望を決めることができた。また、進路チューター制度を通して、最終的には第1志望を100%決めることが出来た。生徒は現在取り組むことを明確に決定できた。 【課題】 面談や進路チューター制度を通して、生徒によって取り組みの差の違いが見られた。 『改善策』 希望進路未決定の生徒の中には、進路チューターの取組にも積極的にでないものもいることから、チューターが計画的に取り組ませる必要がある。	C以下の場合 は取組を改善する。	・進路希望調査 ・生徒へのアンケート
				【成果指標】 進路先決定までに十分な準備ができた。	〔3年〕 中間評価では就職、最終評価では進学において、合格を得るまでに十分な準備ができたと回答した生徒の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	(55.9%) C 76.4%	《成果》 各クラスで受験に向けた雰囲気づくりをすることができ、特に就職では面接、進学では5教科の補習を中心に、生徒一人一人が自身のすべきことを明確にして準備を進めることができた。 【課題】 進学・就職ともに志望理由書や活動報告書の作成に時間がかかっていた。 『改善策』 進学先・就職先の詳細な情報の収集や、自己分析を早期から入念に行う必要がある。	C以下の場合 は取組を改善する。	・進路希望調査 ・生徒へのアンケート
				【努力指標】 生徒の進路意識を高めるために生徒との個人面談を実施した。	生徒一人一人との個人面談回数が、 A 6回以上 B 5回以上 C 4回以上 D 4回未満	(2回) B 5回	《成果》 面談週間が設定され、確実に面談を行う時間が確保できた。生徒の方も、面談時間の設定や面談の意義を理解し面談に臨むことができた。 【課題】 回数を増やすことにより、担任に大きな負担がかかる。面談内容が多岐にわたり、要点が絞れないことが多々あった。 『改善策』 副担任と協力し面談を行う。面談シートを事前に配付し、ポイントを絞った面談を行う。	C以下の場合 は取組を改善する。	・個人面談数調査 ・生徒へのアンケート
④	進路指導課と1年学年団・担任との連携により、進路面接の質を高め、面談回数を増やすことで進路目標の早期決定を促す。	進路指導課第1学年	進路目標の設定が遅れ、自己実現のために授業や総合的な学習の時間を有効に活用できていない生徒がいる。	【努力指標】 生徒の進路意識を高め具体的に進路を決定するために生徒との個人面談を実施した。	生徒一人一人との個人面談回数が、 A 7回以上 B 6回以上 C 5回以上 D 5回未満	(2回) A 7回	《成果》 年間の定期的な面談週間をはじめ、進路チューターなどの導入で効果的な面談ができた。また、学年団と進路指導課が連携を密にすることで具体的な進路の方向性を出すことが出来た。 【課題】 進路チューターにより具体的な上級学校や職種を決定はしたが、生徒によっては受動的であり生徒自ら進んで動く意識改革が求められる。 『改善策』 2学期初期に進路チューターとの面談を行い、進路について考えることを通して、早めに進路意識を持たせる。	C以下の場合 は取組を改善する。	・個人面談数調査 ・生徒へのアンケート
				【努力指標】 生徒の進路実現に向けて個人面談を実施した。	生徒一人一人との個人面談回数が、 A 7回以上 B 6回以上 C 5回以上 D 5回未満	(5回) A 7回	《成果》 受験に向けた指導の中で、生徒が抱える悩みや課題を明らかにすることができ、進路決定に向けて、前向きな気持ちで受験準備に取り組ませることができた。また副担任をはじめ、進路指導課と連携しながら、面談を進めることができた。 【課題】 志望進路が二転三転する生徒が数名いたことから、志望校決定が遅くなるがあった。 『改善策』 生徒と保護者とコミュニケーションを密に行い、進路を決めていく。	C以下の場合 は取組を改善する。	・個人面談数調査及び生徒へのアンケート
2	安全、安心な学校づくりの推進による「規範意識・公共心等の醸成」と、変化できる社会に対応できる精神的な逞しさを備えた「人間力の育成」を図る。	生徒指導課 生徒会 各学年	① 生活時間を自律的に管理できる5分前行動(登校)の一つとして「遅刻0(ゼロ)の日」運動に全校生徒で取り組む。	【成果指標】 「遅刻ゼロ運動」の取組も4年目となり、理由のない遅刻は減ってきたが、遅刻ギリギリの登校が各学年各クラスに若干名みられる。今年度も全校生徒で遅刻ゼロの日が増えるよう運動を続ける。余裕をもった登校が安定した学校生活につながり、時間を上手に管理する習慣を身につけさせたい。	遅刻0(ゼロ)の日が年間合計で、 A 120日以上 B 110日以上 C 100日以上 D 100日未満	(50日) A 130日	《成果》 全校生徒で取り組み、3年生が卒業準備期間に入る2月10日までで、遅刻のない日が130日/159日(81.8%)であった。(昨年度は122日/167日(73.1%)) 【課題】 生徒アンケートにおいて「時間に余裕をもった5分前行動(登校)を意識して行動している」と回答した割合は約85%にとどまり、2、3年生で若干名、遅刻の常習がみられた。 『改善策』 1学期にしっかりと高校生活のリズムを安定させ、基本的な生活習慣が確立するよう意識させる。保護者と連携して生活リズムを崩さないようにする。進路目標をもった積極的な学校生活を送るよう働きかける。	C以下の場合 は取組を改善する。	毎日の出欠調査
			② 「いじめ調査」を月末に実施し、いじめの未然防止、早期発見、早期解決に努める。	【努力指標】 いじめ調査アンケートからでは見えない部分もあることを認識し注意を怠らない。学期はじめの面談週間や相談しやすい雰囲気づくりを心がける。また、メール等による誹謗・中傷などのいじめはなかなか発見しにくく、すべての教職員で生徒を見守る必要がある。	日頃から、いじめ調査や巡回指導、面談や見守り・声かけなど、いじめを見逃さない学校づくり(いじめの未然防止、早期発見、早期解決)に取り組んでいる。 ア. よく当てはまる。 イ. やや当てはまる。 ウ. あまり当てはまらない。 エ. 当てはまらない。 A ア. イの合計が95%以上 B ア. イの合計が90%以上 C ア. イの合計が80%以上 D ア. イの合計が80%未満	(89.2%) B 92.6%	《成果》 朝の挨拶運動や交通安全運動、SH時や授業での教室巡回や昼食時の校内巡視、担任や部顧問の面談週間、毎月はいじめ調査アンケートなど、すべての職員で生徒を見守ることを意識して取り組んだ。(教職員アンケートで、前期は25名/28名、後期は25名/27名が、ア、イに回答) 【課題】 限られた職員数のなか、校務等が重なり時間の確保や調整が難しくなってきた。 『改善策』 すべて教職員の連携や協力体制で取り組めるよう調整する。また、生徒会などの活動からも、いじめを見逃さない風通しのよい学校全体の雰囲気づくりにつながる活動を働きかける。	C以下の場合 は取組を改善する。	教員へのアンケート
			③ 生徒会の「元気で活力ある健全明朗な学校づくり」の目標を実現するため、PTA等の協力も得て生徒がすすんで挨拶する運動を実施する。	【成果指標】 「自分からすすんで挨拶している」と回答した生徒の割合が、 自分から進んで挨拶している生徒が増えた。	「自分からすすんで挨拶している。」と回答した生徒の割合が、 A 95%以上 B 85%以上 C 75%以上 D 75%未満	(97.9%) B 91.0%	《成果》 生徒アンケートで9割以上の生徒が自分から進んで挨拶していると回答している。 【課題】 生徒アンケートの結果、前期は97%であり、自分から進んで挨拶する生徒が減少している。 『改善策』 学年や生徒会、進路指導と連携を図りながら、登校時「おはよう!声かけ運動」、SH時の挨拶指導や学年集会、面接指導等を通じて指導する。教師から挨拶を促すと、ほぼ全員が挨拶を促すことから、挨拶をしない生徒には教師から挨拶する。	C以下の場合 は取組を改善する。	生徒へのアンケート

(様式2) 令和2年度学校経営計画に対する評価計画(重点目標に対する各課・学年の取組)

重点目標	具体的取組	主担当	現 状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	(中間集計) 集計	成果と課題及び改善策等	判定基準	備 考
3 部活動の強化と生徒会活動の活性化を進めるとともに、教職員の多忙化改善に取り組み「生徒と向き合う時間の確保」を図る。	① 部活動加入後の積極的な活動を推進する。	生徒会	多くの生徒が部に加入しているが、所属だけにとどまる生徒も見られ、生徒全員が積極的に部活動に取り組むよう指導する必要がある。 H30(89.4%)、R1(90.7%)	【成果指標】部活動に加入後も、積極的に活動していた。	積極的に部活動を行っている生徒の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	(95.8%) A 93.1%	《成果》 生徒アンケートで前期は95.8%、後期は93.1%の生徒が積極的に部活動を行っていると回答している。 【課題】 全員加入の部活動において、積極的に参加できなかったと回答した生徒もおり、彼らが参加しやすい部活動の在り方を模索する。 『改善策』 部活動に積極的に参加できなかった部活動部員と面談し、彼ら自身が目標を設定し、参加する場を機会を設ける。各部の顧問と連携し、部活動を監督することで、部員の活動が見られていることを生徒に意識させる。	C以下の場合は取組を改善する。	生徒へのアンケート
	② 教職員の多忙化改善に取り組む。	教頭	近年、本校職員の勤務時間外勤務時間が減少してきているが、いまだ部活動指導時間や生徒と向き合う時間の確保と両立できておらず、職員のライフワークバランスを取る必要がある。	【成果指標】適正な退庁時間で、帰宅していた。	職員の勤務時間外勤務時間の平均が、 A 45時間以下 B 50時間以下 C 55時間以下 D 55時間より多い	(30.4時間) A 37.0時間	《成果》 12月末現在で、本校の勤務時間外勤務時間の平均が37.0時間である。4～5月の臨時休校もあり、昨年の平均51.0時間に比べ大幅に減少した。 【課題】 7名が平均50時間(うち、2名が平均60時間)を超えている。 『改善策』 教員の業務の平準化の工夫を更に進めるとともに、業務改善の意識を持つよう指導する。ICTを活用した、業務時間の短縮を図る必要がある。	C以下の場合は取組を改善する。	時間外勤務時間調査
	③ 悩みを持つ生徒に対し、全教職員が生徒に寄り添い、共感的に話を聞く時間を確保する。	保健厚生教育相談	約86%の生徒が「先生方は親身になって相談に乗ってくれている」としている。しかし、約14%の生徒が不信感を抱いている。面談週間はもちろんだが、5分前5分後行動などを通して生徒をよく観察し、職員全体が親身に暖かく生徒に対応していという姿勢を示す必要がある	【満足度指標】教職員が生徒に対し、共感的に親身になって相談になることができた。	「先生方は親身になって相談に乗ってくれた。」と感じている生徒の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	(89.6%) A 96.2%	《成果》 182名中175名の生徒が「親身になって対応してくれる」と感じている。前回よりも6.6%増加した。 【課題】 4名(2%)が心配事や悩みを持ちながらも「心を割って相談できる人がいない」と感じている。 『改善策』 スクールカウンセラーについて周知したり、面談をしてみようなど協力してもらい、全ての生徒が「相談できる人がいる」と感じることができるようになる。	C以下の場合は取組を改善する	生徒へのアンケート
4 地域における6次産業の担い手として、「地域産業の振興に貢献できる人材の育成」を図る。	① 各種イベントやボランティア活動をおして、地域との交流を図るとともに、地域社会に貢献する。	地域産業科 地域創造科	能登町内外には各種イベントやボランティア活動があるが、生徒によっては参加しない傾向がある。全員の生徒が諸活動に参加し地域交流を一層深める必要がある。	【成果指標】多くの活動がある中で2回以上参加することができた。	能登町内外の活動に2回以上参加したと答えた生徒の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	(25.0%) D 48.8%	《成果》 80名中、39名の生徒がボランティア清掃や分野における行事に2回以上参加した。(1年生は25名中16名、2年生は30名中、11名、3年生は28名中12名) 【課題】 学校内でのボランティアがあるものの、全く参加しなかった生徒が32名と全体の38.6%と高い。のと高商店がコロナ禍で制限された。 『改善策』 校内で取り組める活動を早い段階で提示し、生徒に促していく。	C以下の場合は取組を改善する。	生徒へのアンケート(令和3年1月20日実施)回答者数は80名
	② 保護者や地域の方に能登高校の理解を深めてもらい、行事に参加してもらうことで本校の人材育成に協力してもらう。	総務課	「能登高だより」の配布や能登町広報誌「のと広報」に掲載することによって学校理解に効果があると考えられる。今年度も来校者を一層増やす工夫が求められている。様々なイベントとをからめ、PTAの参加人数を増加させていきたい。	【成果指標】来校する保護者・地域住民が増えた。	来校された保護者・地域の方(学級懇談会・能登高祭・能登高商店開店時・教育ウィーク・PTA行事等)の人数の合計が、 A 1400人以上 B 1200人以上 C 1000人以上 D 1000人未満	(630人) D 651人	《成果》 沢山の学校で学校行事が中止される中、本校では感染症対策を万全に整えて「能登高祭」を実施した。来場者を限定し保護者のみの参加としたが2日間で282人の来校があった。PTA活動では例年と変わらぬほど出席していただいた。また、12月より「能登高校CM」を能登町の有線放送で放映していただき、能登高校の存在をPRした。さらに生徒の各種発表会等にもポスターや広報などで広く周知することができた。 【課題】 今年度の来校者数は651人と少なく、今後来校者数の減少が予想される。 『改善策』 イベントの方法やPRの方法について、他の係と協議し、新たな施策を模索する。	C以下の場合は取組を改善する。	行事毎の人数調査